F2-36

災害時における歴史観光地の防災と復興に関する研究
—(その１)鎌倉の寺院をケーススタディとして—

A Study on Disaster Prevention and Rebuilding at Traditional Tourism Area during Disaster
—(Part1)A Case study of temples and shrines in Kamakura—

○中原真緒[1]，横内憲久[2]，岡田智秀[2]，押田佳子[2]，安斎航也[1]，佐藤恵[1]
*Mao Nakahara[1],Norihisa Yokouchi[2],Tomohide Okada[2],Keiko Oshida[2],Kouya Anzai[1],Megumi Sato[1]

Abstract: We investigated the rebuilding process after Grate Kanto Earthquake of the temple and shrine in Kamakura. As a result, it is clarified that the reconstruct of support system was necessary for the future disaster prevention.

１．背景および目的

我が国では，2011 年の東日本大震災をはじめ大小さまざまな地震が発生している．2016 年 4 月に発生した熊本地震は記憶に新しく，まちのシンボルである熊本城や阿蘇神社など，観光資源も甚大な被害を受けた[1]．特にまちの文化の継承を担う歴史観光地においては，観光資源の被災は死活問題といえ，早急な復旧・復興が求められる．

日本有数の観光地である鎌倉市は，現在年間約 2,200 万人が来訪しており，江戸時代から観光都市として発展してきた[2]．しかし，度々大地震で甚大な被害を受けており，直近の大正関東大震災においては，津波や火災などの二次災害による被害記録も残っている[3][4]．

そこで本研究では，鎌倉における大正関東大震災の復興プロセスを把握することで，今後の被災時の観光資源のあり方について言及することを目的とする．なお，本稿では，建造物の損壊が最も多かった長谷地区と，次いで多かった坂ノ下地区の寺社を対象に，大正関東大震災時の復興のプロセスについて明らかにすることを直接の目的とする[3]．

２．研究方法

本稿では，長谷地区と坂ノ下地区を対象地として，7 寺社について文献調査およびヒアリング調査を行った(Table1)．なお，対象寺社の位置関係を Figure1 に，7 寺社の基本情報および調査結果については Table2，3 に示す．

Table1 Outline of the survey(調査概要)　(This is original table by authors)

調査対象	長谷地区･坂ノ下地区　寺社	
調査期間	2016 年 6 月 1 日～2016 年 9 月 30 日	2016 年 7 月 26 日, 2016 年 8 月 29 日, 2016 年 9 月 26 日
調査方法	文献調査[1]~[5]	ヒアリング調査
調査項目	･大正関東大震災時被害状況　･復興期間 ･避難場所提供の有無　･復興支援団体 ･境内地坪数　･避難場所の指定	･復興期間 ･避難場所提供の有無　･復興支援団体 ･現在の防災および耐震における整備について

３．結果および考察

３－１．大正関東大震災からの復興

(１)被害状況—Table2 より，境内の建造物の被害規模は，長谷寺が最も多く 9 件であった．次に多かった寺社は高徳院の 3 件であり，光則寺と甘縄神明社は 2 件であった(Table2)．また，成就院については虚空蔵堂 1 件の沈下がみられたが，その他の被害を受けたものについては詳細な被害規模の記載はみられなかった(Table2)．なお，収玄寺において，被災当時は光則寺の末寺であり，「収玄庵」とし

Figure1 Overview Hase and Sakanosita district(長谷･坂ノ下地区の寺社位置)　(This is original figure by authors)

Table2 The results of investigation into damage of temples and shrines in the past(過去の寺社の被害調査結果)　(This is original table by authors)

寺社名		①高徳院	②長谷寺	③光則寺	④成就院	⑤収玄寺	⑥甘縄神明社	⑦御霊神社
宗派[5]		浄土宗	浄土宗	日蓮宗	真言宗	日蓮宗	神道	神道
境内地坪数[5]		3865.875 坪	2026.77 坪	1370 坪	596 坪	131.16 坪	127.04 坪	639.98 坪
当時の避難場所の有無[3]		臨時集団避難場所	無	無	無	無	無	集団避難場所
資金源[6]		国庫補助金	勧進･陸軍大臣･よろずや		自院の貯蓄･檀家			無
復興活動の指揮[6]		修復委員会	勧進･巡礼者･よろずや		檀家			
復興期間[6][7]		大正 13 年～大正 14 年	昭和初期～昭和中期		昭和初期～昭和 60 年頃			傾斜の修復のみ
被害規模[3]	全潰	庫裡	鐘楼･阿弥陀堂･大黒堂 仏殿･念佛堂･書院･庫裡	－	本殿・客殿 破損[3]		拝殿	－
	半潰･大破	－	観音堂	－			本殿	社殿
	傾斜･移動	仁王門・大仏	観音像	本堂・庫裡			－	－
	少破	－	－	－			－	－
	沈下	－	－	－	虚空蔵堂		－	公会堂

1：日大理工・学部・まち　2：日大理工・教員・まち

ていたため被災記録は残されていない[6]．そのため，以降では収玄寺をのぞく 6 社を対象とし，さらに特徴的な復興プロセスが捉えられた寺院 3 社と神社 1 社について考察する．

（2）復興期間—最も早期に着手している寺社は，高徳院の大仏(以下，鎌倉大仏)であり，被災翌年の 1924(大正 13)年には修理に着手し，1925(大正 14)年には完了している(Table2)．これに対して，長谷寺と成就院は共に昭和初期に着手しており，終了時期に関しては，長谷寺が昭和中期，成就院が昭和 60 年代としている(Table2)．

これらのことから，対象寺社では鎌倉大仏が最も短期で復興しており，最も長期にわたり修復を行っていたのは成就院であることがわかる．なお，長谷寺は鐘楼・阿弥陀堂・大黒堂・仏殿・書院・庫裡の全壊がみられたことに対し，成就院は全壊の記録がないことから，復興・修復に要する期間は建造物の被害規模によらないといえる(Table2)．なお，御霊神社の被害については御社の傾斜のみであり，修復に時間を要さなかった．

（3）復興の資金源および支援主体—鎌倉大仏は国宝に指定されていたことから，国庫補助により修理が行われた(Table2)．一方で，被災当時の長谷寺と成就院には，建造物における文化財の指定はなく，行政による支援等はなかった．そのため，資金源に関して，長谷寺は近隣のよろずやと陸軍大臣，勧進によるものが大きく，成就院は自院の蓄えと檀家からの寄進等により賄っていた．また，復興活動の指揮等について，国宝を所有する高徳院は，文化財保護委員会と協議を行い，修復委員会を組織していた[6]．そして，長谷寺は坂東の札所の巡礼地となっていたことから，巡礼者も復興の人手として関わっていた(Table2)．一方で，成就院は資金同様に檀家の力が大きいとしており，いずれも資金援助を行った団体が携わっている．

以上より，各寺院の修復および復興の期間は，資金援助の有無と各寺院の組織力に大きく関わるといえる．

３－２．現状の防災における寺社の役割

（1）オープンスペースとしての寺社—現在，鎌倉市の一時滞在施設の 7 か所中 5 か所に寺社が指定されており，長谷寺も含まれている(Table3)．また，風水害等避難場所についても，79 か所中 17 か所に寺社の指定があり，長谷・坂ノ下地区の緊急避難空地では，5 か所中「高徳院」「長谷寺」「光則寺」「御霊神社」の 4 寺社が指定されている．以上より，避難場所に多くの寺社が指定されていることから，今後の寺社は，公的なオープンスペースとして町から求められる機能を備えるべきであるといえよう(Table3)．

（2）各寺社の災害対策—Table3 より，長谷寺は観音像への耐震ダンパーの設置と強度審査に基づく補強を行っている．また，成就院は本堂の柱や床下，壁に鉄筋を入れるなどの補強工事を行っていた．御霊神社については建造物の補強工事は未着手であり，指定されている避難場所整備の計画段階であった．これらより，防災整備は各寺社で行っており、行政による支援等は行われていないことがわかった．また，このような耐震工事について，文化財指定のない建造物は住職の意向が大きく関わるといった回答※2 が挙がっており，その運営の一助として観光にも積極的な対応をとっていることも明らかになった．

４．小結

本稿では，大正関東大震災における復興プロセスを把握することにより，復興期間の長さは国宝の指定など支援団体の規模によることを捉えた．一方で，現在の防災に関して，指定文化財ではないものは住職の意向が大きく関わっており，補助金等の資金面での援助はないことから、観光産業などを活かし、各寺社で賄っていることを捉えた．以上より，今後の歴史観光資源の防災と復興は，文化財に関与する規制やサポート体制のあり方について見直す必要性があるといえよう．

５．謝辞

本研究は，日本学術振興会平成 28 年度科学研究費補助金(基礎基盤(C) 16K02080)の支援により実施されました．ここに謝意を表します．

６．補注･参考文献

【補注】

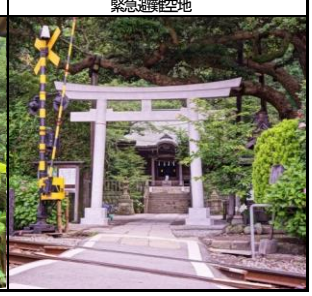
※1　成就院へのヒアリング回答より，被害を受けた建造物は「本殿」「客殿」「虚空蔵堂」としている．

※2　長谷寺へのヒアリング調査より得られた回答．

【参考文献】

[1] 日本経済新聞 電子版 2016年5月13日記事 [2] 押田佳子ほか3名, 紀行文より捉えた近世鎌倉観光における通過地点の景観構成とその緩衝形態に関する研究, ランドスケープ研究 vol. 74, no. 5, pp. 431~436, 公益社団法人日本造園学会, 2011 [3] 清川來吉, 鎌倉震災誌, 鎌倉町役場, pp. 62~66, pp. 93~105, 堀修造, 1930. 12. 25 [4] 鎌倉市 防災安全部 総合防災課, かまくら 防災読本 命を守るために…, pp25~pp28. 鎌倉市 防災安全部 総合防災課, 2014 年 2 月 [5] 編纂委員会, 鎌倉市史 社寺編, p124. p125. pp. 138~141, p179. p180. pp. 425~429, pp. 436~438, p447, 鎌倉市, 1959. 10. 20 [6] 高徳院国宝銅造阿弥陀如来坐像修理工事委員会編, 高徳院国宝銅鋳阿弥陀如来坐像修理工事報告書, p14. p112, 1961. 7 [7] 長谷寺所蔵資料(復興期間に関する内容) [8] 伊藤玄二郎, 鎌倉の寺 小事典, p160. p161, かまくら春秋社, 2008. 12. 1

Table3 Outline of the temples and shrines now(現在の寺社の概要)

(This is original table by authors)

寺院名	①高徳院	②長谷寺	⑤成就院	④御霊神社
文化財指定[5]	大仏	なし	なし	なし
災害対策	耐震審査のみ	観音像:ダンパー設置, その他補強	本堂:柱･床下･壁の補強 客殿:柱等補強	指定避難場所:整備計画
避難場所の指定[4]	緊急避難空地	一時避難場所/風水害等避難場所/緊急避難空地	無	緊急避難空地
写真